

家庭科教育における「命の教育」の可能性

—— 学校における実践事例の分析から ——

速水多佳子*, 浅見静香**

(キーワード: 自殺対策, 命の教育, 家庭科, 実践事例)

I 問題の所在

わが国の自殺者数は、警察庁がまとめた自殺統計資料によると、平成10年に急増しており、その後現在に至るまで14年連続で3万人を超えている。平成18年に自殺対策基本法が制定し、内閣府に自殺総合対策会議が設置され、さらに平成19年6月には、政府が推進すべき自殺対策の指針として、「自殺総合対策大綱」が取りまとめられ、閣議決定された。また、自殺者数が最も増加する3月を「自殺対策強化月間」とし、そして次に自殺者数が多くなる傾向がある下半期の10月を踏まえ、9月に「自殺予防週間」を設定し、広報活動や啓発活動がされている。「自殺は、その多くが防ぐことのできる社会的な問題である」と、WHO（世界保健機関）が平成15年の世界自殺予防デーに明言しており、わが国においても、様々な自殺対策としての取り組みが行われているが、自殺者数の著しい減少は見られず、現在も深刻な社会問題となっている。

自殺者数を年齢別で見ると、児童生徒の自殺者数は毎年300人前後で推移しており、全自殺者数に占める未成年者の割合は、約2%である。全体に占める割合は少ないが、「平成24年版自殺対策白書」の「平成10年の値を100とした年齢階級別の自殺死亡率の推移」を見ると、全体的には20歳代で自殺死亡率が最も高まるという傾向がある。そして次が30歳代、その次が19歳以下となっており、若い世代に自殺が多いことがわかる。また、年代別の死因順位においては、15～39歳の各年代の死因の第1位は自殺である。男女別では、男性の20～44歳の死因順位の第1位が自殺であり、女性では男性よりさらに若い世代にそれが見られ、15～34歳の死因の第1位が自殺である。国際的に見ると、先進国7カ国のうち、日本以外の6カ国の15～34歳の死因の第1位が事故であるのに対し、日本は死因の第1位が自殺である。「平成24年版自殺対策白書」の中では、20歳代以下の若年層の自殺死亡率の上昇について触れ、「20歳代以下の若者の『就職失敗』による自殺者数が平成21年を境に急増していることにも注意が必要である」と指摘している。これからの社会を担う若い世代の自殺者が多いという現状は、憂慮に堪えない。また、若い世代は、いじめによる自殺報道やアイドル歌手の自殺報道などによる他者からの影響を受けやすく、自殺の連鎖も起こりやすい。困難にぶつかった時に死に向かうのではなく、乗り越えようとする力の育成が必要である。

文部科学省は、平成19年に「子どもの自殺予防のための取組に向けて（第1次報告）」を取りまとめ、平成21年3月に「教師が知っておきたい子どもの自殺予防」のマニュアル、平成22年3月に「子どもの自殺が起きたときの緊急対応の手引き」を各学校等に配付し、家庭、地域、学校関係機関の協力を呼びかけている。このマニュアルの中には、自分の体を傷つける自傷行為を繰り返す中・高校生が10%を下らないという報告や、「死にたいと思ったことがある」という子どもが小学校の高学年から増え始め、中・高校生では2～3割にも達するという報告がある。このようなことから、児童生徒の自殺問題は学校教育における重要な課題であり、自殺対策に真剣に取り組まなければならないことがわかる。

教育基本法第2条「教育の目標」の中に、「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」と記載がある。また、学校教育法第21条「義務教育の目標」の中にも、「生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」と書かれている。小学校は平成23年度、中学校は平成24年度から実施されている学習指導要領の総則の中では、道徳教育と関連して、「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち・・・」とある。平成25年度から

*鳴門教育大学生活・健康系コース（家庭）

**鳴門教育大学大学院学校教育研究科

実施される高等学校の学習指導要領の総則の中にも同じ文言がある。高等学校は、小・中学校とは異なり、道德の時間が時間割の中で設けられていないために、特に配慮をして、「学校の教育活動全体を通じて、生徒が人間としての在り方生き方を主体的に探究し、豊かな自己形成ができるように指導を行うこと」とある。生命を尊ぶこと、自他の生命を尊重することは、学校教育の中で最も根本的なことである。しかし、学校教育現場の実情は、「平成23年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」（文部科学省）によると、学校内における暴力行為発生件数は、全体では前年度よりは減少したものの、小学校では増加傾向にある。また、いじめの認知件数も前年度より減少はしているが、いじめを認知した学校の全学校数に占める割合は40%近くを占めている。いじめを苦にした自殺に関する報道が、春休み後の新学期や夏休みなどの長期休業後の学期初めに目立つなど、いじめによる自殺が後を絶たないのが現状であり、自他の命を尊重すること、相手を思いやる心をはぐくむ指導が今後さらに必要である。

命はかけがえのないものである。上地（2009）は、悲惨な事件や事故、災難、被害が身近で多発している今日の状況から、命の大切さを実感し、命と正面から向き合う新たな取り組みが求められているとしている。そして、子どもたちの状況として、少子化、都市化、情報化などの社会の急激な変化により、家での出産や親族の死などの命にふれる機会が減少していること、パソコンやゲーム機を中心とした遊びが増えたために、虚構の世界の中で作り上げられた死に頻繁に接する中で、現実感覚が麻痺していることをあげ、実感を伴わない死の感覚が命の軽視につながっているのではないかと指摘している。つまり、児童生徒が命の大切さを実感する場が減少しつつあるのに伴い、自他の生命を尊重しようとする態度も失われつつある現状を鑑みて、命と真摯に向き合う教育を学校で取り上げて行う必要があると言える。

家庭科は、生活全般を学習対象としており、生命をはぐくんだり生活をしたりする基盤としての家族・家庭の意義を理解させ、将来を見通してよりよい生活をしようとする能力を育成することを目標としている教科である。家庭科は、まさに「生きる力」をはぐくむ教科であり、「命の教育」と深くかかわることが可能である。これまでも家庭科では、保育に関する領域で、子どもを生み育てることの意義や子どもの発達について学び、幼稚園や保育所等の訪問などで幼児と触れ合う実習を行っており、命をはぐくむことの大切さを学び、命を感じることができる内容を扱ってきている。家庭科は前述したように、生活全般を学習対象としており、人の一生を生涯発達の視点でとらえることができる。これまでのような保育に関する領域だけではなく、衣生活や食生活、住生活などのその他の領域でも幅広く命を実感させるような指導を行い、現在必要とされている「命の教育」ができるのではないかと考える。

そこで、以上のような問題意識により本研究は、現在の学校教育における命の教育の必要性から、これまで先進的に実践されてきている命に関する教育の実践内容を分析することで、今後の家庭科における「命の教育」の可能性を探ることを目的とした。

Ⅱ 研究方法

先行研究によると、「生と死の教育」のための教材開発として、得丸ら（1999）がパソコンを使用する小学校高学年向け教材を制作しているが、この時点ではまだ授業実践は行われていない。そして、「生と死の教育」に関しては、兵庫県教育委員会が「心の教育」の一環として、平成9年度から試行を開始しているが、全国的にはこれからの取組みが期待されるとしている。また、得丸ら（2001）によると、わが国の命に関する教育は、兵庫県を除き、組織的・系統的な活動はなく、個人的な努力によって取り組んでいる現状であると報告している。その後、滝沢ら（2008）が、道德教育の観点から命の授業の意義について、3つの事例から報告しており、大曲ら（2012）は、「自分と家族について考える死に関する学習プログラム」を開発し、小学校4年生を対象として実践を行うなど、個人的な取組みの報告が見られる。これらに対して、兵庫県教育委員会の取組みは、組織的に進められており、兵庫教育大学との連携を図って、教員の研修プログラムを開発し、小・中・高等学校及び特別支援学校での授業実践を行っている。その実践は県下で広がりを見せており、現在も継続して実施されている。

兵庫県教育委員会は、1995年の阪神・淡路大震災と1997年の須磨区における小学生連続殺傷事件を重大事象と受け止め、平成9年に「心の教育緊急会議」を開き、翌年の平成10年に「生と死を考える教職員研修プログラム開発委員会」を設置、同年から心の教育に関する実践的研究を開始している。そしてその後、平成17年には「『命の大切さ』を実感させる教育プログラム」を策定するなど、命に関する教育に組織的に取り組んできている。また、平成18年3月に「『命の大切さ』を実感させる教育への提言（第1版）」をとりまとめ、平成19年3月に「『命

の大切さ』を実感させる教育への提言(改訂版)」、そして平成19年から平成22年にかけて「実践事例集」を作成、発行しており、平成23年3月には、兵庫県下のすべての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の心の教育の実態を調査した結果を「『心の教育』に関する調査報告書」としてまとめている。

そこで本研究は、命に関する教育に、先進的に取り組んでいる兵庫県の実践事例を取り上げることとした。資料として用いたものを以下に示す。

- ①「兵庫教育」(平成19年4月～平成24年3月)
- ②「命の大切さを実感させる教育プログラム」実践事例集(平成19年3月)
- ③「命の大切さを実感させる教育プログラムⅡ」実践事例集(平成20年3月)
- ④「命の大切さを実感させる教育プログラムⅢ」実践事例集(平成22年3月)

上記の資料から、実践事例のすべてを整理し、その指導内容の分析を行った。

Ⅲ 結果と考察

1. 実践事例について

上記の資料をもとに実践事例を整理したところ、①の「兵庫教育」の事例と、②③④の「実践事例集」の中に記載されている事例との重なりが多く見られた。そのため、①の「兵庫教育」の5年間分の内容をもとにして、表を作成することにした。各校の実践事例を、学校種、対象学年、テーマ、実践前の子どもの実態、主な学習内容や体験内容、実践後の学習効果、実践後の振り返り、合計授業時間数、授業を実践した教科等についてまとめた。(表1)教科等の中には、道徳や特別活動、総合的な学習の時間(表中では総合と記載)などを含んでいる。授業時間数や教科等が不明の場合は、空欄としている。表中の「家庭科との関連」は、平成25年度から実施される高等学校家庭科の共通教科としての3科目である「家庭基礎」、「家庭総合」、「生活デザイン」の学習指導要領の内容を表2のように11の項目に分類して、それぞれの実践事例が、家庭科のどの項目と関連しているかを記載した。家庭科の指導内容を、高等学校を基に分類したのは、今回の学習指導要領の改訂により、共通教科「家庭」の内容が、小学校家庭科及び中学校技術・家庭科との一貫性を重視して改善されたため、すべての学校種の家庭科の学習内容を網羅していると考えたからである。また、「兵庫教育」の中で、「実践事例集」と重複して掲載されている事例は、表中に記した。

2. 実践事例の内容

(1) 校種、対象学年、時間数、教科等

「兵庫教育」の5年間の実践事例は、全部で25件が記載されており、学校種別では、小学校11件、中学校8件、高等学校6件(特別支援学校高等部を含む)であった。小学校の事例を対象学年別で見ると、3年生を対象とした事例が3件、4年生3件、5年生3件、6年生2件であり、低学年を対象とした事例はなかった。得丸ら(2000)は、「児童は小学校1年から『死』の概念を持ち、特に小学校、5、6年以上は大人と同じ『死』の概念を持つ」と報告している。また、生方(2010)は、「年齢によって死の理解を段階分けする仕方は、研究者ごとに多少の差異があるが、多くは死の概念が成熟する年齢を10歳前後としている」と述べるとともに、死の概念の成熟とは、「死の普遍性」(あらゆる生き物に死は訪れる)、「不可逆性」(一度死んだら二度と生き返らない)、「非機能性」(生命体の諸機能がすべて停止すること)の3つの要素が獲得されることとしている。竹田(2010)は、指導する教員について、「生と死の問題には明確な正解がないため、教師の死生観や人生経験が問われることが多い」と指導の困難さについて述べている。「命の教育」を行うことは、教員自身が命に真剣に向き合わなければならないこともあって、教員に戸惑いがあり、また教員の研鑽も必要となることから、特に小学校の低学年という発達段階では扱いにくいために、実践事例の報告がないのであろう。

授業時間数は、25件のすべての事例の記載はなかったが、表1を見ると、最も少ない事例が10時間、最も多い事例は47時間となっており、多くの時間を費やしている。これらの時間にさらに、事前・事後指導の時間が加わり、ガイダンスやまとめ、授業を行うための学級づくりやその後の継続的な指導も含めると、多大な時間が必要となる。また、これらの実践事例の特徴としては、体験を伴う活動を取り入れることから時間を要しており、各クラスとして取り組む授業内だけではなく、修学旅行や文化祭などの学校行事として学校全体で、年間を通じて取り組んでいる例も見られる。

教科等は、総合的な学習の時間での扱いが最も多くて11件、次が道徳の6件であった。各教科では、最も多い

表1 命の大切さを実感させる教育プログラムの実践例

事例集の掲載	校種	対象学年	テーマ	子どもの実態	主な学習内容	学習効果	実践後の振り返り	時間数	教科等	家庭科との関連	
1	○	小学校	3年	自分の誕生や成長を振り返り「命の大切さ」を実感しようーたまごのお世話体験を中心にしてー	不安と悩みを抱える(学力不振、家庭環境) 自尊心の欠如・ストレスによる問題行動	たまごの世話	自尊心を育てる	親や家族の役割が大きい	25+α	道徳 総合	保育 家族 家庭
2	○	中学校	1年 3年	つながり支えあう命の重みー生・病・死をとおしてー	「命の大切さ」を実感として受け止められていない言動	自分史新聞	自尊心を高める 「未来は自分で切り拓く」という意志を持つ重要性を知る	「よりよく生きよう」「人とつながろう」という気持ちの芽生え 教師自身が再認識	16+α	国語・理科 音楽・美術 保健体育 技術・家庭 外国語・道徳 特別活動 総合	家族 家庭
3	○	小学校	3年	はくからもコウノトリと同じ!?ーコウノトリ野生復帰の取り組みを通して命を見つめるー	満たされない寂しさ 乱暴な言葉で友達を傷つける 家庭環境の辛さ	ピオトープ コウノトリ農法	1つの命を支えるための多くの命の存在を知る	食べる命と食べられる命の両方あり影の部分も光を取り入れる	47+α	総合	食物
4	○	高等学校	2年	「つながり」の中で生かされている命ー屋久島・種子島への修学旅行をおして学ぶー	自然への感性、自己肯定感の育成から自立心 積極性、やる気に満ちた集団	修学旅行(屋久島・種子島)のための事前学習(ビデオ学習、読書会、講演会)、課題「屋久島で学んだこと」等	「命のつながり」「命の大切さ」を実感させたい 周囲の命によって生かされている	大自然の中で生きる命への感動、つながり、命の大切さを実感	25+α	修学旅行 総合 各教科(現代文、生物)による事前学習	環境
5	○	小学校	3年	「いのち」生き生きー家族や地域の人と共に学ぶ「いのちの学習」	純朴で優しい 他人を傷つける言動 自分本位な行動による人に対する理解の欠如 命に対する表面上の理解	自分史 卵殻の育成 乳幼児との触れ合い ピオトープ作り	児童のわずかながらの変化		20+α		家族 家庭 保育 環境
6	○	中学校	2年	震災を超えてきた街から学ぶー防災教育と命の教育との融合を図るー	震災の実体験が薄れている	阪神淡路大震災の被災者から聞き取り・発表、追悼のための集会の企画・運営 救命救急法やボラティア体験	震災の恐ろしさ・命の重みを実感、生きることの素晴らしさを実感 生徒自身が人のために出来ることを実感		29+α	道徳 総合	住居 福祉
7	○	小学校	4年	成長の実感	少子化によって、子どもが安心して成長しやすい環境になっている	妊婦との交流 新生児の沐浴体験 乳児との継続的な関わり 「命」の学級経営(授業含む) 2分の1成人式	命の誕生や生命の営みの不思議さを実感 小さな命をいとおしく思う気持ちを持つ 成長する姿を感じ取る 自分たちの成長を感じ取る		23+α	保健体育 道徳 特別活動 総合	保育 家族 家庭
8	○	高等学校	3年	命を見つめ、自己の生き方を探る	優しい一面 自分勝手な考えや行動 家庭において会話の相手が限定されている	乳幼児・高齢者・障害者とのふれあい体験	命を見つめる 自己有用感を実感させ、自己の生き方を探る	自己有用感を感じ、存在への自信につながり自己肯定感につながった	17+α	総合	保育 高齢者 福祉
9	○	小学校	5年 6年	かけがえない命・つながる命	死んだ人が生き返ると思う低学年児童 死は遠いものである意識	ゲストティーチャー 祖母の伝記づくり	死について考えることの大切さを実感 毎日を精一杯生きることが大切であることを実感	自己肯定感を持たせた 将来に対して肯定的に捉えられる	23+α	国語 理科 体育(保健) 家庭 道徳 総合	高齢者
10	○	中学校	2年	心を伝え合う豊かなコミュニケーション	自分の気持ちや考えを適切に表現するのが苦手	グループ・エンカウンター ストレスマネジメントやアサーション・トレーニング いじめの問題	心がつながる体験を通して、信頼し合うことの喜びを実感	道徳の授業・特別活動・総合的な学習の時間	10+α	道徳 特別活動 総合	

事例集の掲載	校種	対象学年	テーマ	子どもの実態	主な学習内容	学習効果	実践後の振り返り	時間数	教科等	家庭科との関連	
11	○	高等学校	4年	命一つながる命と心ー 言葉の一人歩きを考えるーメール・ブログをとおしてー	人間関係が希薄化	様々なコミュニケーション(言語・文字、非言語、言葉の一人歩き) 自己理解・他者理解を深める「誕生日チェーン」「自己紹介・他己紹介」 言葉の一人歩きを考える「言葉の力」コミュニケーションの難しさを理解・インターネット上のコミュニケーションを考える よりよく生きるために必要な他者とのコミュニケーションのあり方	自分の言葉で「心」から表現し「人と人とのつながり」を大切にする ネット社会でのマナーやコミュニケーションについて考え、望ましい人間関係を築く力を培う	・情報モラルだけでなく、「心」の問題も認識させる ・コミュニケーションから自分の特徴を知り、自他の尊重する話し方や行動を考えさせる ・協調性を養う「学年・クラスづくり」を心がける			
12	○	小学校	5年	「以心伝心」の仲間をめざして	「人間関係づくり」に悩む子ども 怒りの感情を安易な言葉で表現し、相手を傷つけている 対処法を学んでいない	名前調べ 様々な感情に気づき、友達への感情に共感し支え合う体験(ストレスマネージメント、アサーション・トレーニング)、「ペア・リラクゼーション」	成長の願いが込められていることを理解する 自他を大切にする態度を培う	「ありのままの自分を受け入れる」ということが自尊感情を育むスタート 「リラクゼーション」「アサーション」等は体験的に人間関係を学ぶ有効な手段	11+α	・国語 ・体育(保健) ・道徳 ・総合	家族 ・家庭
13	○	中学校	1年	ストレス上手につきあおうースクールカウンセラーとの連携ー	「自尊感情の低下」「コミュニケーション能力の低下」	リラクゼーション体験	ストレスについて理解し、人や物を傷つけない 対処法を知る	教師自身の研鑽が必要			
14	○	小学校	4年	死ってなに？生きるってどういうこと？ー命に関する絵本を使ってー	問題行動や不安定な状況の子どもが存在する	家族からの聞き取り 高齢者との交流 絵本の活用「しにがみさん」「かみがえよう、命の大切さ」詩「命ー電池が切れるまでー」	命には限りがあることを考えることをとおして、今ある命の大切さを実感する	死の学習によって、命の有限性が明確化 教師の断定的な考えを押し付けない		家族 ・家庭 ・高齢者	
15	○	中学校	1年	すべてのことがらは「命の大切さ」につながる 命の重みを考えるー沖繩・阪神淡路大震災・生きることー	大半が落ち着いた学校生活を送っているが、より一層、命や人権についての学習を深めたい	新聞の活用「いじめられている君へ、いじめている君へ」 修学旅行(沖縄の学習) 防災センター等での見学、体験 絵本「たったひとつのたからもの」「葉っぱのフレディ」「いのちのおはなし」	感動を持った題材を生徒に与える 限りある命・かけがえない命を実感することによって、周りの人とともに、精一杯生きようとする意欲を持つ	感動を持った題材を生徒に与える 文字や言葉だけでなく「体験を重視」できるよう努めた 「よりよく生きること」を目指すことが「命の大切さ」を実感することになる	23+α	・社会 ・道徳 ・特別活動 ・総合	環境 ・住居
16		高等学校	1年 2年	「福祉のこころ」が育む「命の大切さ」	「福祉のこころ」を身につけることを目指したカリキュラムより、充実した人生を歩み「命の大切さ」の実感につながることを期待	ボランティア実践(福祉施設での交流と体験学習) 家庭科(妊婦体験) 情報科(コミュニケーション力の育成)	自己実現により充実した人生を歩み「命の大切さ」の実感につながることを期待 「福祉のこころ」思いやりの心、共生の心、自発の心	実感は感動が入り口となり、心をいきいきと動かす体験によって生まれる		福祉 ・家庭 ・情報	福祉 ・保育

事例集の掲載	校種	対象学年	テーマ	子どもの実態	主な学習内容	学習効果	実践後の振り返り	時間数	教科等	家庭科との関連
17	小学校	5年	2007/『命』を見つめよう	前向きで素直な児童であるが、人との関係がうまく作れない子もいる	ブックトーク、心臓の鼓動を聞く、AED/心肺蘇生法、震災体験者・乳幼児とその親・高齢者・戦争帰還者、助産師との交流、家族への手紙	たくさんの人とのつながりの中で生きていることを知り、命を大切にしようとする意欲を持たせる	体験学習により、知識ではなく実感としてとらえられ、家族への感謝の気持ちを持たせた		社会	保育 福祉 高齢者 家族 家庭
			2008/『人・命』発見	相手を傷つける発言、相手との関係を切り捨てようとする傾向	戦争と平和/ブックトーク、人権学習/差別問題、高齢者からの戦争体験談、部落、在日コリアン人、日本赤十字の話、未来の自分に対しての手紙、劇づくり		継続的な学習となり、身近な問題であり自分たちで解決している問題であることを実感できたが、精神面の成長に伴わず自分を大切にできない児童もいる			高齢者 家族 家庭
18	小学校	4年	絵本「はく・わたしだけのこと」-人とのつながり、命のつながりを考えて-		自分だけの絵本作り(参考:『はくだけのこと』『いのちのまつり』)	命を大切にし、ありのままの自分を認め互いに認め合って生きていく	3冊の絵本作りによって、命のつながり、人とのつながりを考えた1年となり、自分の命をつないでくれた感謝の気持ちを持たせた			家族 家庭
19	○	中学校	3年	地域の方々からまなぶこと ----- 今生きていること一守られてきた自分たちの命一	阪神淡路大震災で在校生や親が犠牲に、生徒たちはまだ生まれていない	身近な人、地域の人の聞き取り、震災体験聞き取り新聞づくり・交流・1.17での交流	当時の様子を聞き取ること、自分の命の大切さを考える	震災の記憶がない生徒も、真剣に考え話し合った、今後震災後に生まれてきた生徒にどのように伝えていくかが課題	総合	住居
20	○	高等学校		生かされていることへの感謝一「運命」から「使命」へ一	日々命と向き合っている	(国語)「なめとこ山の熊」、奇魂祭(特活)、鶏の飼育・解体実習(畜産)	命の大切さをより深く実感させ、体験を言語化することで「生かされている」ことへの感謝を芽生えさせ、「他者を支え、生まれてきたことの使命を果たせる生き方」を生徒に模索してほしい	体験や思いを言語化することで、自分を肯定する気持ちが育ち、他者へ伝えることが自分の生き方を振り返ることができ、教師自身も「生かされている」ことを実感した	国語 LHR 学校行事	食物
21	○	小学校	6年	人は一人で生きられない		動物写真家の姿、下級生との関わりや行事(日記・学級通信、練習)		自分自身に問いかけていく姿、友達を思う姿		福祉
22	○	中学校	2年	きずなことば	学校で震災学習、平和学習をしている、社会ではいじめなどの子どもの命に関わる事件や事故が起こっている	情報モラル/フレミング、アサーティブ	「命の大切さ」を実感させる教育の一層充実	生徒がメール等の書き込みを考えるきっかけとなり相手に伝える大切さに気づけ、人と人とのつながり・きずなの大切さを考えさせられた	情報	住居
23	○	小学校		自分や友達を大切に、人間関係を広げよう	自尊心の低い傾向	心の健康から自分や友達の良いところを見つけ、自分を見つめる実践、アサーション・トレーニング	自分や他者の命を大切に	日常生活にすぐ実践できるようにするのは難しいが、体験によって実感し理解につながったように思われ、自分を見つめる機会となった	保健	
24	○	特別支援学校	高等部3年	仲間っていいな!~力を合わせて、お出かけしよう~	言語理解や日常生活の動作能力は同じ程度だが、心理状態や障害特性は様々	仲間づくり(あったかことばとチクチクことば、協力ジェンガ、など)話し合い	仲間の存在の大切さから「命」や「生きる喜び」を実感できること	仲間の存在が「生きる喜び」や「命の大切さ」につながる 生徒を信じて見守る姿勢を貫くことが、関わり合う力、知恵を出し合う力、主張する力、譲り合う力をより高めるものになった		
25		中学校	1年 2年 3年	『あったか言葉』でみんなあったまろう!	自尊心が低い・乱雑な言葉つかい	生徒の「言われてうれしい言葉」「心がホッとする言葉」「がんばろうと思える言葉」を掲示		生徒の様子から言葉が掲載される喜び、共有する楽しさが見られた	保健	

表2 高等学校家庭科の内容の分類

家庭基礎	家庭総合	生活デザイン	
(1) 人の一生と家族・家庭及び福祉 ア 青年期の自立と家族・家庭 イ 子どもの発達と保育 ウ 高齢期の生活 エ 共生社会と福祉	(1) 人の一生と家族・家庭 ア 人の一生と青年期の自立 イ 家族・家庭と社会	(1) 人の一生と家族・家庭及び福祉 ア 青年期の自立と家族・家庭 イ 子どもの発達と保育 ウ 高齢期の生活 エ 共生社会と福祉	
(2) 生活の自立及び消費と環境 ア 食事と健康 イ 被服管理と着装 ウ 住居と住環境 エ 消費生活と生涯を見通した経済の計画 オ ライフスタイルと環境 カ 生涯の生活設計	(2) 子どもや高齢者とのかかわりと福祉 ア 子どもの発達と保育・福祉 イ 高齢者の生活と福祉 ウ 共生社会における家庭や地域	オ 子どもとの触れ合い カ 高齢者とのコミュニケーション	
(3) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動	(3) 生活における経済の計画と消費 ア 生活における経済の計画 イ 消費行動と意思決定 ウ 消費者の権利と責任	(2) 消費や環境に配慮したライフスタイルの確立 ア 消費生活と生涯を見通した経済の計画 イ ライフスタイルと環境 ウ 生涯の生活設計	
	(4) 生活の科学と環境 ア 食生活の科学と文化 イ 衣生活の科学と文化 ウ 住生活の科学と文化 エ 持続可能な社会を目指したライフスタイルの確立	(3) 食生活の設計と創造 ア 家族の健康と食事 イ おいしさの科学と調理 ウ 食生活と環境 エ 食生活のデザインと実践	
	(5) 生涯の生活設計 ア 生活資源とその活用 イ ライフスタイルと生活設計	(4) 衣生活の設計と創造 ア 装いの科学と表現 イ 被服の構成と製作 ウ 衣生活の管理と環境 エ 衣生活の中でデザインと実践	
	(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動	(5) 住生活の設計と創造 ア 家族の生活と住居 イ 快適さの科学と住空間の設計 ウ 住居と住環境 エ 住生活のデザインと実践	
		(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動	

のが体育の保健分野の5件であり、家庭科は3件であった。複数の教科等の時間で担当して指導している場合がほとんどであり、その他の教科としては、国語、社会、理科、音楽、美術、英語、情報、福祉で扱っている。総合的な学習の時間は、横断的・総合的な学習を様々な体験活動をとおして行い、自己の在り方生き方を考えることを目標としているため、取り組みやすいのであろう。また道徳は、学習指導要領によると、学習項目の「3主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」の中に、小学校の低学年では、「生きることを喜び、生命を大切にすることを心をもつ」、中学年では、「生命の尊さを感じ取り、生命のあるものを大切にすること」、高学年では、「生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重すること」、中学校では、「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重すること」との記載がある。道徳では、自らの生命の大切さを深く自覚させるとともに、他の生命を尊重する態度を身に付けさせる指導が求められており、「命の教育」が学習の中に位置付けられている。

(2) テーマ、子どもの実態

テーマの5年間の流れを見ると、平成19年度、平成20年度は、自分の成長を振り返ることなどから命と向き合い、命の重みや大切さを実感させるというテーマが多いが、平成21年度からは、命そのものを取り上げるのではなく、他者との共生という視点を取り入れるようになってきている。他者との交流の中から、自分と他者をよく見つめ、つながりを大切にして互いを認め合い、そうすることから自他の命を尊重する態度を身に付けさせることをねらいとしている。

テーマ設定の前提となっている各校の子どもの実態については、自尊感情が低いこと、人間関係が構築できて

いないこと、命が実感できていないことなどがあげられている。自分自身の価値や重要性を自覚する自尊感情が低いために心が満たされないという状況や、他者とのコミュニケーションがうまく取れないために、自分の気持ちを素直に表現することができず、問題行動を起こして他者を傷つけてしまうといった行動が見られる。やはり、少子化や核家族化の影響で、子ども自身のこれまでの経験として、生や死に直面する機会が減っており、そのために命の大切さが実感できていないようである。兵庫県は、阪神・淡路大震災の被災地であるが、震災から年数が経過して街も復興しており、震災の記憶がなく、震災を経験していない子どもたちの世代となっている。その子どもたちへ被災した地域に住んでいる者として、震災を教材に命の重みを考えさせようとする取組みが見られる。

(3) 主な学習内容、学習効果、実践後の振り返り

主な学習内容を見ると、すべての事例で、実習や演習などの体験的な活動が取り入れられており、体験をとおして学ぶことによって、知識の習得だけではなく実感を持った授業を実践している。体験的な活動の内容は様々であるが、小学校では4件の事例で、自分史の作成や自分の名前の由来調べを行っている。自分の誕生や成長について家族に聞き取りをしていく活動をする中で、親や家族とのつながりを実感することができ、自分がいかに愛情をかけて育てられてきたかに気づき、自尊感情を育てることができている。また、乳幼児との触れ合い実習は、小学校で2件、高等学校で1件あり、高齢者との触れ合い実習が小学校で1件、高等学校で1件あった。実際に乳幼児を抱っこしたり、無邪気な寝顔を見たり、幼児と一緒に遊ぶことで子どもたちの喜ぶ姿に触れて、命の重みやすばらしさを感じ、自分自身の成長と結びつけることができている。介護老人保健施設の訪問では、高齢者との交流の時間をもつことから人々の様々な生き方に触れ、命の重みや生きることの尊厳を感じることができている。また、このような訪問先での交流をとおして、自己有用感を肌で感じ、それが自分の存在への自信となり、自己肯定感につながっている。

一方、これまでに自分が未経験であり、関わったことのない立場の方からの話を聞くことを目的として、ゲストティーチャーを招聘するというのも多くの事例で取り入れられている。例えば、お母さんと赤ちゃんを招いて妊娠時の様子や気持ち、育児についての話を聞いたり、震災体験についてボランティアの方に、震災当時の状況から復興の苦労などを話していただいたり、戦争体験について話していただくなどの活動がある。自分とは異なる立場の人からの実体験を伴った話を聞き、その内容をもとにして話し合いなどの活動を行うことで、これまでに全く知らなかったことに気づき、ゲストティーチャーの思いを受け止め、命の重みをより深く感じ取ることができている。

学習効果や実践後の振り返りの中で、「自尊感情」という言葉がよく使われている。前述の子どもの実態の中に自尊感情が低いということがあげられており、実践後には自尊感情がある程度の高まりを見せていることから、効果があったと報告されている。「『命の大切さ』を実感させる教育への提言」(2006)の中で、「命の大切さを実感させる教育プログラム」には、以下の5つの視点があると述べている。

- ①自尊感情を育む
- ②体験活動を充実させる
 - ア 自然・社会・人との豊かな関わり
 - イ 心が動く感動との出会い
 - ウ 感性や想像力への働きかけ
- ③情報社会の影の部分に対応する
- ④命を守るための知恵と態度を育成する
- ⑤教員自身が命の意味を問いかける

まず、自然や社会や人と豊かにかかわる体験活動をとおして、子どもたちが自分自身を価値ある存在と認め、自分を大切に思う自尊感情を持てるようにすること。自尊感情を高めることによって感性が活性化して感動が生み出され、周りの人と共有し共感することによって、限りある命を生きていることの素晴らしさを感じることができるようになる。自分の存在を価値あるものとして、自分自身が認めることができなければ、生きていることの素晴らしさを感じることはできない。つまり、まず自尊感情を高めることが必要なのである。

(4) 家庭科との関連

各実践事例が、家庭科のどの指導内容と関連しているかを項目別に集計したのが表3である。1つの事例が、

複数の項目と関連している場合もあった。最も多い項目が、「家族・家庭」の9件、次が「保育」6件、「高齢者」、「福祉」がともに5件であり、全体では34件の関連があった。

「家族・家庭」の項目では、家族・家庭の意義や社会とのかかわりについて考えさせ、家族の一員としての役割を果たし、家族員が協力して家庭を築き生活を営むことを学ぶ。「保育」は、子どもの発達と生活、親の役割などについて学び、中学校、高等学校では、実際の子どもの触れ合いを取り入れる場合が多く、かかわることをとおして保育への関心を持たせ、子どもとのコミュニケーション能力を高める。「高齢者」、「福祉」でも、同様に高齢者との触れ合いを取り入れる場合が多く、地域の高齢者を訪問したり、学校に招いたり、福祉施設等を訪問するなどして、高齢者について理解させ、人生の終末期における人生を全うするためのケアの在り方について考えさせる。このように各項目は、命と関連させることが可能である。

「人の一生」、「被服」、「消費生活」、「生活設計」の項目は、関連する事例が見られなかった。「人の一生」、「生活設計」については、今回の実践の中で、生命の誕生や高齢者の死について個別に扱った事例はあったが、人の一生をとおして扱った事例がなかった。しかしむしろ、家庭科は人の一生を生涯発達の視点でとらえて生き方を考えることが可能であるため、この項目で命について学ぶことは十分に可能である。また、身体を覆う「被服」については、衣生活と健康、衣生活と環境として命の教育が考えられ、「消費生活」は、情報社会や消費者問題の背景や被害とその防止についての内容で取扱うことができる。このように、家庭科ではすべての項目の中で「命の教育」を行うことが可能であると考えられる。

表3 家庭科との項目別関連件数

家庭科の項目	実践件数(件)
人の一生	0
家族・家庭	9
保育	6
高齢者	5
福祉	5
食物	2
被服	0
住居	4
消費生活	0
環境	3
生活設計	0
合計	34

IV まとめ

自殺者数の増加が社会問題となっており、その中でも近年、若い世代の自殺死亡率が高まっているという傾向がある。文部科学省も平成19年に「子どもの自殺予防のための取組みに向けて（第1次報告）」を取りまとめるなど、対策に乗り出している。また、少子化、都市化、情報化などの社会の急激な変化により、子どもたちが命と正面から向き合う機会が減少しており、自他の生命を尊重しようとする態度が失われている。そのため、学校教育において、命と真摯に向き合う機会を設ける必要があり、「命の教育」を行うことが求められている。本研究は、先進的に命に関する教育に取り組んでいる兵庫県の実践事例を整理して分析することから、家族の生活の営みを人の一生とのかかわりの中でとらえ、総合的に学ぶ教科である家庭科における「命の教育」の可能性を探ることを目的とした。

兵庫県の過去5年間分の実践事例25件（小学校11件、中学校8件、高等学校6件）について、対象学年、時間数、教科等、テーマ、子どもの実態、学習内容、効果などの観点から整理を試みた。その結果、授業時間数が40時間を超える事例もあり、かなりの時間を費やし、複数の教科で関連させながら学校全体で取り組んでいる事例が多く見られた。そのため、学校全体の協力を得ることができないと、「命の教育」を取り入れることができない現状が確認できる。また、各事例と家庭科の指導内容との関連を見た結果、家庭科で扱う指導内容は、すべての項目において、「命の教育」を取扱うことが可能であることがわかった。家庭科ではこれまでも保育に関する項目などで命をはぐくむことの大切さについては学んでいるが、保育以外の項目でも家庭科の担当教員が命を意識して授業を行うことで、年間を通じて継続的に「命の教育」を行うことが可能であると考えられる。学校全体で「命の教育」に取り組むことの方が、大きな成果をあげると考えられるが、教員の合意を得て、計画から実践へと踏み出すには時間を要する。その点、家庭科では担当教員の判断で、これまでの学習内容に「命の教育」の視点を取り入れるだけで実践が可能である。

「命の教育」を進めるには、まず子どもたちの自尊感情をはぐくむ必要がある。自尊感情を高めることで、「自分は生きていてよいのだ」、「自分の存在は価値のあることだ」というゆるぎない確信をもつことができる。近藤卓(2010)によると、自尊感情には、基本的自尊感情（乳幼児期からの親や親に代わる養育者からの絶対的な愛とその後の他者との共有体験の繰り返しによって形成されるもの）と社会的自尊感情（他者との比較や優劣で決

まってくるもので、勝ったり優れていたりすれば高まる)の2つの領域があるとしている。そして、この2つの自尊感情はともに学校教育などでの体験ではぐくむことが可能であるとしている。

今後は、自尊感情をはぐくむことをねらいとした家庭科における「命の教育」の授業計画を作成して実践につなげることで、家庭科教育の質的な向上を図っていきたい。

参考文献

警察庁, 「平成23年中における自殺の状況」, 2012. 3. 9

<http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/H23jisatsunojokyo.pdf>

内閣府, 「平成24年版自殺対策白書」

<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/whitepaper/w-2012/pdf/index.html>

文部科学省, 「教師が知っておきたい子どもの自殺予防」, 2009. 3

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/04/13/1259190.pdf

文部科学省, 「平成23年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/_icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf

文部科学省, 『小学校学習指導要領解説総則編』, 東洋館出版社, 2008. 8

文部科学省, 『中学校学習指導要領解説総則編』, ぎょうせい, 2008. 9

文部科学省, 『高等学校学習指導要領解説総則編』, 東山書房, 2009. 11

上地安昭, 「危機社会を生きるいのちの教育をいかに」, 梶田叡一編集, 『<いのち>の教育』, 金子書房, 2009, pp. 36-46

得丸定子他, 「『生と死の教育』のための教材開発-小学校高学年向け教材-」, 日本家政学会誌, vol.50. No.11, 1999, pp. 1189-1196

得丸定子他, 「学校教育における『いのちの教育』の重要性と取り組みについて」, 上越教育大学研究紀要, 第21巻, 第1号, 2001, pp. 11-19

滝沢利直他, 「『いのちの授業』の今日的意義について-道德教育の観点から-」, 東京工芸大学工学部紀要, vol. 31. NO.2, 2008, pp. 50-60

大曲美佐子他, 「実践報告: 小学校2年生を対象に開発した死に関する学習プログラムを小学校4年生へ実践した授業報告」, 日本教科教育学会誌, 第34巻第4号, 2012, pp. 39-48

兵庫県立教育研修所, 『兵庫教育』, 兵庫県教育委員会, 2007. 4~2012. 3, No.674~No.733

兵庫県立教育研修所心の教育総合センター, 『「命の大切さを実感させる教育プログラム」実践事例集』, 2007. 3

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/pdf/jissen/JIREISYU0703.pdfh>

兵庫県立教育研修所心の教育総合センター, 『「命の大切さを実感させる教育プログラム」実践事例集Ⅱ』, 2008. 3

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/2008/pdf/all.pdf>

兵庫県立教育研修所心の教育総合センター, 『「命の大切さを実感させる教育プログラム」実践事例集Ⅲ』, 2010. 3

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/2010/pdf/zentai.pdf>

文部科学省, 『高等学校学習指導要領解説家庭編』, 開隆堂, 2010. 5

生方淳子, 「学童期の子どもはどのように死を認識するか」, 袖井孝子, 内田信子編『子どもの暮らしの安全・安心~命の教育へ2』, 2010, pp. 90-95

竹田久美子, 「命の教育はどのように進められてきたか」, 袖井孝子, 内田信子編『子どもの暮らしの安全・安心~命の教育へ2』, 2010, pp. 119-123

兵庫県立教育研修所心の教育総合センター, 『「命の大切さ」を実感させる教育への提言 [改訂版]』, 2007. 3

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/pdf/INOCHI0703.pdf>

近藤卓, 『自尊感情と共有体験の心理学』, 金子書房, 2010

Possibilities for “Education on Life” in Home Economics Education

— Analysis of Case Examples of Implementation at Schools —

HAYAMI Takako* and ASAMI Shizuka**

(Keywords : measures for preventing suicides, education on life, home economics, case examples of implementation)

The annual number of suicides in Japan has exceeded 30,000 since 1998, including approximately 300 children. While this may be a small proportion of the overall number, suicide among children is an important issue in school education given the vulnerability of children to influence from others and the risk of suicide clusters. Home economics is a subject that covers life in general and captures the lives of individuals from the perspective of lifelong development. It is a subject that cultivates the strength to live, and may provide opportunities for in-depth implementation of “education on life”. In the present study, we aimed to explore possibilities for implementation of “education on life” in home economics by analyzing case examples of implementation in Hyogo Prefecture, which has taken a leading role in education concerning life.

Analysis revealed the following 25 case examples in the 5-year period between 2007 and 2011: elementary school, n=11; junior high school, n=8; and senior high school, n=6. Education on life was implemented in settings such as class subjects, moral education, and overall learning, and often involved hands-on activities and was in some cases provided in conjunction with school events. As learning effects, the joy of living derived from enhancement of self-esteem and self-worth was seen in many cases. In addition, implementation of “education on life” in home economics education was considered sufficiently feasible based on its relevance to independence in life, which is the objective of home economics, and these approaches were thought to play an important role in education.

*Department of Home Economics Education, Naruto University of Education

**Graduate School of Education, Naruto University of Education